

第三章  
生命倫理委員会

### 第三章 生命倫理委員会

例のアパートの一番端の部屋で出がらしのお茶を飲んでしていると勝手にテレビの電源が入る。

「生命倫理委員会」という看板が掲げられた大きなドアが現れる。カメラがそのドアから中に入る。端がかすんで見えないほどの巨大な部屋だ。出席者は人類を除く地球上のあらゆる生命体。ノアの箱舟に乗った生き物たちがここに集合したようだ。

「なんだ？ 何が起こるんだ」

田中を遮って大家が小さな声を上げる。

「何か言ってる。静かに……」

イグアナの顔がアップされている。

「隕石がぶつかったときよりひどい」

サンショウウオが同情する。

「確かあなたたち爬虫類の祖先の恐竜は隕石の衝突で全滅したなあ」

するとネズミが前歯を出したまま応じる。

「お陰でわたしたち哺乳類に出番が回ってきた」

「それが地球がおかしくなった原因だ」

怒りに満ちた声が部屋中に響くとネズミに代わってチンパンジーが頭を下げる。

「わかった」

チンパンジーの言葉を聞こうと今度は静まりかえる。

「反省している」

「反省なら猿でも……いや猿が悪いのではない。猿から進化したあの高慢な人類が諸悪の根源だ」

「反省すべきは人間だ！」

「そうだ！ そうだ！」

会場は異様な雰囲気に含まれるが逃げようとするネズミの尻尾を押さえつけて猫が静かに語る。

「反省しても何も変わらない。これからどうするかだ」

「みんな色々頑張ったが、絶滅したりペットにされたり散々な目に遭った」

「私たちはコートや襟巻きにされたわ」

ミンクが憤る。すると象が鼻を回しながらしゃべる。

「おれたちは牙をハンコにされた」

するとカブト虫が涙ながらに羽を広げる。

「僕たちは背中にピンを刺されて標本にされた」

身体をくねらせて蛇が舌を出す。

「我が輩はアダムとイブをエデンから追い出した犯人にされた」

普段はしゃべらない針葉樹が珍しく発言する。

「火あぶりの刑で根こそぎ消滅させられた」

「山火事は悲惨だ。樹木だけでなくそこにいたすべての生命体が死滅した」

「人間はなぜ残酷なことばかりするんだ？」

ここで目に見えるかどうかぐらいのとても小さな「生命体？」が現れる。

「ご先祖様のご登壇！ 一同頭が高い。控えおろう！」

すべての生命体が立ち上がって誰が入ってきたのか探す。やがて単細胞の原始生物が恭しく頭を下げる。

「苦しゅうない。面を上げる」

ごくごく小さなご先祖様と呼ばれた「生命体？」が応じる。やっとうご先祖様を捜し当てた微生物は顔を上げるが、ほとんどの他の生命体はまだご先祖様を探している。やがて誰かが叫ぶ。

「ご先祖様。今こそ人類にお仕置きを！」

「分かっておる！ すでに作戦を実行した。今までとはまったく異なる戦術で人類を抹殺する」

「新参者の生意気な人類をこの地球から抹消してください」

「そうだ！ 奴らは核兵器という隕石の何万倍もある怪しいモノを造っていがみ合っている。それを使って勝手に滅びるのはいいが、我々も巻き添えにしようとしている」

「まったくはた迷惑なことだ。さて今回の作戦はこれまでコレラ作戦やペスト作戦やインフルエンザ作戦とはまったく異なる」

「本当に大丈夫ですか。最近ではエイズ作戦もエボラ作戦も失敗しています」

「人類の歴史は知れていると、つまり新参者と侮ったのが根本的な過ちだった」

「しかも奴らのワクチン防衛網は日増しに強力になっています。一方で独裁的な権力者が国民から自由を取り上げて我々に対抗しようとしています」

「それは一部だ。逆に自由を取り上げ損ねて先軍の感染拡大を手助けしている」

「確かに。アメリカやヨーロッパ戦線では圧倒的に勝利を収めています。ロシアや南米戦線もです」

「油断はできません。先ほども言ったが独裁国家の中国では撤退を余儀なくさせられた」

「一方自粛作戦で我々を追い詰めようとしている国もあります」

「なんだ。その自粛作戦というのは？」

「ゲリラ戦です。独裁者を生み出さずに一人一人がレジスタンス的な抵抗をすれば我々も無事では済みません」

「まだ『マスクはいやだ』とか『みんなと一緒に飲み会をする』という馬鹿なヤツがいるうちに何とかしなければ」

「馬鹿とは何だ！」

一部の生命体から文句が出る。それは馬族と鹿族だった。

「すまん、すまん。わしがバカだった。よし、秘密兵器を使おう」

「秘密兵器？」

「クラスター爆弾だ」

「クラスター？ 聞き慣れない兵器だ」

「兵器ではない。集団感染させるのだ」

「分かりました。集団感染拡大作戦の実行にかかります」

\*\*\*

人間に無理矢理飼い慣らされた動物や美味な動植物が総動員された。パンダなどの愛くるしい動物は今まで以上に愛嬌を振りまいて、イルカなどの芸達者な動物もウルトラCを連発して、三密環境を提供する。マグロやキャビアなどはわざと捕らえられて宴会を盛り上げる。ウイルスと親戚関係にある酵母菌はせっせとうまい酒を造ってマグロ作戦を側面から支える……など、数え切れないほどの精鋭部隊が投入された。

一方人間はと言えば、先祖様の攻撃に対する防御は貧弱だ。マスクはウイルス感染に有効な盾だが使用を嫌う人が多い。消毒液もすべての国に行き渡っているわけではない。そしてワクチンの製造もままならず普及がスムーズに進まない。

元はと言えば人類は何十兆という細胞から成り立っているが、その細胞の祖先はウイルスだ。要は自分の身体の成り立ちを自覚せずに巨大化した脳が好き勝手なことを始めた。金、名誉、贅沢……やりたい放題だ。

特に権力者は金、名譽のため寿命を可能な限り延ばすことに執着する。不老不死を目指すのではない。自分が生きている間、自分とは一族が不遇な目に遭わないように身の回りを固めるのだ。自分たちを責めるのは自国民だけではない。他国の動向も脅威だ。だから本来国民を守るべき軍隊を自分たちの財産や利益を守るために使おうとする。

他方我慢を強いられる国民は見返りを要求する。独裁者であつても無視はできない。一部の国民に特権を与え忠実な僕しもべに仕立てる。そうするとその僕しもべも同じことをする。第二次特権階級を組織化するのだ。高級官僚の誕生だ。やがて裾野が広がって下級官僚が生まれる。下々の者でも多少の贅沢は許されるようになる。

このように贅沢を求める方向にバイアスがかかると最終的には地球に負荷がかかる。負荷がかかるということは資源を湯水のように使用することになる。

資源は偏在する場合もあるが、すべてが一カ所に存在することはない。人類のいい意味での英知はあらゆる資源を活用して便利なモノ、そして贅沢品を製造する。古くは木材、絹、毛皮……。他方では石炭、さらには石油。そして鉄鉱石など金属資源……レアメタル……ウラン。

木材を大量に消費することによって森林が少なくなり草原化あるいは砂漠化した。ミンクをはじめとしてかなりの動植物たちが絶滅したり絶滅危惧種に指定されたりした。毛皮が手に入らなくなったせいか寒さを防ぐために木材や石炭や石油で暖を取ろうと炭素をどんどん放出させた。もちろんそのときに発生するエネルギーの恩恵を受けて様々なモノを製造した。

### 第三章 生命倫理委員会

そして温暖化を招いた。先進国では脱炭素を目指して再生クリーンエネルギーの活用を目指す。原子力発電所を温存している国の方が多い。やっかいなことに新たに豊かな生活を目指す開発途上国は原子力発電を目指す。

\*\*\*

「もういい！　こんな話は」

田中がテレビに向かって叫ぶと映像が消えて山本が現れる。

「要は人間の横暴をウイルスがくい止めようとしていると言いたいんだろ？」

「くどかったかしら」

「それより新型コロナウイルスは一体何をしようとしているのじゃ」

「田中さんの言うとおりかも。生命に満ちあふれた地球を何とかしようとしているのかも知れないわ」

「ちよつと話がされるけれど、恐竜つて地球を滅亡させようとしたのかも知れない」

「どういうことじゃ」

「あんな巨大動物があちこちで闊歩したらほかの動物たちは絶滅するんじゃないかと思ったんだ」

「恐竜が地球を支配していたという証拠はあるのか？」

田中が即答する。



「あります」

「？」

「色んなところで恐竜の化石がこれでもかと言うぐらい出てくるじゃないですか」

「そんな印象を受けるわね」

「でもじゃ。恐竜が絶滅したのは隕石のせいじゃないのか」

「ウイルスかもね」

「ところでウイルスは生命体ではないのでは？」

「自ら複製できないから、生命体と呼べないようね」

「それにあまりにも小さすぎ人間の目には見えない。でも生命体の起源なんだろう？」

「その『起源』とやらに人間は次々と感染して大パニックじゃ」

「まるで新興宗教に入信して自我を失うような感じがするわね」

「感染と入信はまったく違うけれど、なにかウイルスは神様みたいな感じがする。ウイルス教

をどんどん広めて……」

「神様か。確かに威厳のある大ご先祖様じゃ」

「神様が天罰を？」

テレビの中の山本がじっと大家を見つめる。田中が首を横に数度振ってから山本に提案する。

「根本的な先祖のウイルスから進化という名で様々な生命体が生まれ派生して植物がそして動

物が生まれた。動物では脊椎動物が、そう、魚類、両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類が出現した」横にいる大家の反応を確かめてから続ける。

「小さなネズミ。大きなゾウ。空飛ぶコウモリ。足が速いチーター。何もしないナマケモノ。誰からも愛されるパンダ」

するとテレビに田中の知りたそうな映像が流れ始める。

\*\*\*

人類に進化しなかったサルたち。力持ちのゴリラ。賢いチンパンジー。最も人間に近いとされるボノボの映像が現れる。そして解説が始まる。もちろんナレータは山本だ。

「知恵にかけてはサルより人間の赤ん坊の方が遙かに賢いと言われています。サルと人間の間には歴然とした差があります。まず脳の大きさです。人間の脳は桁違いに大きく機能も卓越しています。一方、鯨やイルカや象の脳は人間より大きいし重い。でも脳化指数は人間が一番高い……」

大家が割り込む。

「なんじゃ、脳化指数というのは？」

山本ではなく田中が答える。

「体重に見合った脳の大きさを比べることで。乱暴に言えば象の脳が人間の脳より五倍大きくても体重が十倍なら人間の方が賢いということになります」

「なるほど」

大家が納得すると山本が続ける。画面にはそれぞれの動物の全身と脳の画像が現れる。

「でも人間と決定的に違うのは、たとえば象は草食動物でライオンやキリンやシマウマを絶滅させることはありません。鯨もイルカを食べることはないし好物のオキアミを全滅させることもありません。脳を持つほとんどの動物が徹底的に敵対して相手の種を絶滅させることはないのです」

鯨たちの画像が消えて山本が自分の頭を指さす。

「鯨たちの脳には相手を徹底的に打ちのめすというプログラムは組み込まれていません。それが悲しいことに……人間の脳には……」

ここで画面がブラックアウトすると涙声になった山本の鼻をかむ音が聞こえる。

「失礼しました」

再びナレーションが始まる。

「脳を持たない細胞もそうです。相手を滅ぼすという行動に出るところか、集合して大きな細胞を作り、あるいは手を携えて組織化します。つまりより高度な生命体を作り上げるのですが、それは多種多様な生命体を構築するためです」

画面では精子が卵子に突入するCGが映されている。

「人は約六〇兆個の細胞で構成されています。たった一つの受精卵という細胞が分裂を繰り返

して人を作り上げます。その一つ一つの細胞に善と悪が潜んでいるわけがないのに完成された人には他の生命体を全滅させる能力が形成されず。無垢な細胞で構成されている人間がなぜほかの生命体の権利を侵害するのでしょうか？ ほかの生命体だけではありません」

画面が変わってスペイン人らしき軍がインカの人々を追い詰めるシーンが繰り返される。

「西欧諸国は南北アメリカ大陸の原住民を絶滅させたりアフリカの原住民を奴隷化したりしました。彼らは自分たち以外の人類と新しい土地を発見したと大はしゃぎしました。原住民から見ると西欧人を発見したのですが、その西欧人がやってきたヨーロッパを見たことがないので、発見したのは西洋人で原住民は単なる被発見者で殺されたり奴隷にされたり……同じ人間同士ですらこういうことになりますから、人類以外の生命体はたまったものではありません」

山本の声が止まる。

「そういうことなのか」

田中は目が覚めたような表情をする。大家もうなだれる。

「何のことはない。最高の脳を持つ人間は愚かな動物じゃ」

「人間の存在は地球上のあらゆる生命体にとっては死活問題だわ。誰が細胞を集めてあんな狂気生命体を、いえ凶器生命体を製造したのでしょうか？ 生命の先祖であるウイルスは後悔しているのかも知れないわ」

「なぜ生命は進化し続けて人類に至ったのか？ 誰に責任があるのか？ 今人類に対抗できる

生命体はいない。どんなにライオンやサメやコブラやタランチュラが頑張っても人類にとって敵ではない。あらゆる生命の元になったウイルスしか対抗勢力はないと言うことなのか？」

「でも人類はワクチンで対抗するわ」

「ワクチン自体はウイルスを元に作られているぞ」

田中に頷くと大家が続ける。

「毒をもって毒を制するのじゃ」

「そうじゃないわ。制することはできないわ。ウイルスはご先祖様だから共存しなければならぬはず。ウイルスだけじゃなくてあらゆる生命体と共存しなければならぬ」

田中が挟む。

「持ちつ持たれずだ」

山本は頷きながら続ける。

「なのに自分たちの都合でほかの生命やその生命が残した資源をむさぼる。たとえば石油や石炭分、さらにナトリウム、カルシウム、マグネシウム……ウランまでも……」

「核兵器が使用されれば隕石衝突以上の大惨事が起こる」

「これまでの話を聞いていると、地球という神様がウイルスを使って自分の身体にまとわりつく人類という名の病原菌を退治しているんじゃないだろうか」

「なるほど。大家さんの言うとおりだ。人間はワクチンを造ってウイルスに対抗しようとする

のと同じで、地球はすべての生命体を守るために自分をむしろ悪玉菌の人類を一掃しようとしてウイルスを使っているんだ」

「馬鹿な人間どもはウイルス感染防止と経済の両立などとぬかしておるが、人間の活発な経済活動が他の生命体の生存を脅かしていることにまったく気づいておらん。地球に負荷をかけるい生活をしなければならんのじゃ」

「でも手遅れだわ。便利な生活に慣れっこになっているし、新興国の国民たちは先進国並みの生活を目指しているわ」

「じゃがこのままでは『人類』対『人類以外の生命体』の戦争になってしまうぞ。その強力な兵士がウイルスじゃ」

「『人類の英知を結集してこの戦いに勝利しなければ』と指導者たちが声高々に叫ぶが、ウイルスを含む人類以外の生命体との共存を目指そうと表明する指導者は皆無に近い」

「人類が滅亡すれば他の生命体は幸せに生きていけるけれど、他の生命体の数パーセントも絶滅すれば人類は絶滅するわ」

「そのとおりじゃ。食物連鎖という鎖がズタズタに切り裂かれてしまうのじゃ」

「ゴーツー・トラベルやゴーツー・イートだと浮かれている場合じゃないと思うけれど」

「人間には謙虚さがないわね」

「六〇兆の細胞が人間を支えているのに六〇億の人間が地球を痛めつけている」

『自然に帰れ』という人々の意見は正論じゃが自然というのは厳しいものじゃ。だから便利さや豊かさを追求してきたのじゃ。これは人間の性、つまり肥大化した脳みそのわがまま、いや、脳みそを肥大化させることしか得意技がない人間の宿命か」

「もう手遅れなのかも」

\*\*\*

「AIの進化とウイルスの感染能力の進化のどちらが早いんだろうか。今のところウイルスは第一波、第二波、第三波……と波状攻撃を繰り返している。一方人間が造ったAI、ある意味その代表かも知れないスーパーコンピュータ富士山でも咳やくしゃみの飛沫をシミュレーションするのが関の山。その結果を重要視する人もいるけれど、インパクトを感じる人は少ないよな気がする」

「ウイルスには脳や神経はないと聞くがコンピュータにはあるのか？」

「大家がコンピュータに明るい田中に尋ねる。」

『CPU（中央演算処理装置）が脳だ』と断言できないけれど、仮にそうだとするとメモリ（記憶装置）と配線で繋がっているから、配線が神経なのかなあ」

「まず脳はあるのか？」

「うーん……人間の脳とは余りも違うんです」

「人間と比べてとは言っていない。じゃあ、コンピュータもウイルスに感染するとよく田中さ

んは言うが、そういう意味では人間と同じなのか？」

「人間に感染するウイルスはコンピュータには感染しない……！」

ここで田中が絶句する。

「ウイルスに感染したコンピュータは死にはしない。でも人間は感染したら死に至ることもある。コンピュータ……AIは感染しても死なないと言うことは永遠に生きる？ いや違う！」

AIは生命体じゃない。ゲームで勝利したって喜びを感じることはないし……そうだ！ AIは子孫を残せない！」

田中はそう言い終わると口から泡を吹き出して床に倒れ込む。

「田中さん！」

大家とテレビの中の山本が同時に叫ぶ。

\*\*\*

例の不思議なテレビでは先ほどからコロナウイルスに関する解説が流れている。大家と田中が熱心に画面を見つめる。

生命とは「命を生む」つまり自分自身を複製して子孫に命を引き継ぐという特徴を持っている。ところが細胞の五〇分の一程度の大きさしかない小さなウイルスは自分で複製を造れない。だからウイルスには宿主が必要とする。例えば人間の細胞に入り込んでその細胞に自分のコピーをどんどん造らせる。そして細胞を破裂させてほかの細胞に入っていく。これを感染と言う。



このように自分で自分を複製できないから生命とは呼べない。でも細胞を利用してウイルスはその数を増やすことができる。

「そうか。大先祖様と言うより神様じゃな」

「神？」

「神と言ってもいろいろな神様がいますが、それはこっちに置いて、神山太郎という神がいるとする。しかも単細胞の分かりやすい神様じゃ。細胞分裂すると神山一郎と神山花子という息子や娘になる。もしそうなら神山太郎はどこにいったのじゃ？ 引退したのか？ 引退せずに自分自身が二つになったただけなのか？ 分裂が続くと神だらけになってしまう。大勢の神は何のために徒党を組むのか？ 進化して生命の多様性を目指すためか？ そうなら生命の多様性を邪魔する者がいれば、それを阻止するために本当の神様に登場してもらわなければならない。何しろ細胞は生命体の構成要素じゃから、自分の起源である大本の神様ウイルスに事情を訴えて多様性を阻害する邪悪な敵を排除しなければならん。神山太郎はそのため死ぬことはなく宿主となってウイルスの増殖を推進するのじゃ」

「面白い話ですね。邪悪な敵とは人間のことですね」

「生命倫理委員会の目的は神の目的でもあるという事ね」

「そうならないように人間は生命体としてのルールを遵守しなければならぬということじゃ」  
「鳥インフルエンザとか言っているけれど、それは人間が勝手に命名したウイルスの名前。だ

### 第三章 生命倫理委員会

「つて鳥は生物の多様性を侵害してはいないもの」